

多文化関係学会ニュースレター

第8号 2006年1月



目次	
2005年度全国大会の報告「岐路に立つ多文化インターアクション」 * 基調講演 「二重性日本観と中国観の克服」 * プレコンフェレンス 「研究方法リサーチ・ワークショップ」 * オープン・フォーラム 「東アジア文化圏の協働課題を探る」 * ラウンド・テーブル 「日本人の忘れ物ーゆるみ、きしみ、ゆがみ」	1
2005年度第2～4回理事会記録	6
「私の提言」シリーズ 第2回	9
地区研究会報告 * 北海道 * 関東 * 関西	10
Call for Papers 「多文化関係学」	14
地区研究会案内 * 関東 * 中部 * 四国	14
関連学会情報地区研究会案内	16
第5回多文化関係学会年次大会のお知らせ	16
編集後記	16

2005年度年次大会報告

2005年10月 21日(金)・22日(土)・23日(日) 名古屋学院大学
大会テーマ: 岐路に立つ多文化インターラクシオン

基調講演

「日中相互認識のずれと残された課題: 共生モデルを模索して」

講演者: 王 敏 (法政大学教授)

2005年10月22日(土) 14:10~15:30

大谷みどり (島根県立大学)

第4回多文化関係学会の基調講演は、「日中相互認識のずれと残された課題」というテーマのもと、法政大学の王敏教授による非常に時宜を得た講演を聴くことができた。二国間の在り方が問い直されている日中関係について、王氏は歴史的な背景と、今日の中国社会の激しい変化、そして中国の国民性を織り交ぜ、中国の日本観を多角的に、かつ詳しく講演された。

王氏はまず、両国に大きな衝撃を与えた「反日デモ」について、「現象」の一つであると述べた上、1895年の下関条約に始まり、戊戌の政変、義和団事件、辛亥革命、五四運動と、歴史的な反日デモの流れを解説し、続いて、反日デモを起こした中国人にとっての愛国心の意味と重要性を強調した。またデモに影響した他の要因として、中国では儒教的な教えから不満はウチにはぶつけず外に向けて出やすいこと。日本の以心伝心などとは対照的に、中国はより積極的な表現文化であること。また一人っ子政策の影響で若者に忍耐力やコミュニケーション力が不足しており、デモを通して自己表現し同世代間の繋がりを強化しようとしたこと。そして、グローバリズムの中で、中国はよりナショナリズム的になってきており、歴史教育に関しては、日本は現代史が弱いのに対し、中国は現代史に重きをおいていること等を指摘した。しかしながら一方で、中国の若者は小さい頃から、アニメなどを通して日本文化に親しんできている為、日本に対しては関心が強く、王氏は「大好きな日本に対する反日的態度。二重性」も強調された。

今後の重要な研究課題として、お互いに何が知りたいのか、何に関心があるのかをよく知り、また自分の目線だけで相手を見るのではなく、双方ともより精密な研究が必要であると結ばれた。歴史的に見ても、また今後ますます重要性を増す日中関係に関して、非常に意義のある講演であり、この学会が目指す、多角的な研究と理解が必要であることを再認識させられた講演でもあった。

プリ・カンファレンス ワークショップ

「エスノグラフィー：なにをどう分析し、記述するか」

講師：森田京子 Ph.D. (教育人類学)

大会前日にエスノグラフィー研究方法について、プリ・カンファレンス ワークショップが開催された。

2005年10月21日(金) 16:00～19:00

松永 典子 (九州大学大学院比較社会文化研究院)

はじめに、「教育人類学」、「エスノグラフィー」そのいずれについてもほとんど知識のない者の報告であることをご容赦いただきたい。私がこのワークショップに参加した動機は、異文化間接触研究に応用できそうな調査研究方法を知りたいという点にあった。特に、このワークショップの副題にある「何を分析し、記述するか」ということ自体に関心があったため、記述の具体例を示していただいた点がありがたく、わかりやすかった。同時に非常に刺激的な示唆を受けた。一言で言えば「熱い」ワークショップであった。第一に講師が熱い。第二に参加者が熱い。第三に「エスノグラフィー」という研究手法自体が熱い。

まず、第一の点についてであるが、講師の森田京子氏は3年以上にわたりひとつの学校をフィールドとして「記録」し、「分析」してきたツワモノである。その調査結果を本としてまとめるため、専任の職を辞したと聞いてさらにタダモノではないと唸らされた。

第二の点について印象深かったのは、2点挙げられる。①「質的調査の妥当性」をどう検証するのかについて、多くの参加者が共通課題として掲げていた点である。これに対しては様々な項目が講師からも挙げられていた。中でも、調査者自身が自文化を客観的に、新鮮に見る訓練が必要だ(自文化の中の当たり前のことに気づく)という指摘は研究者としては、基本的に必要な姿勢だと改めて気づかされた。また、②現在修士論文執筆中の院生諸氏が大挙して参加されていた点である。「データは大量にあるが、どう記述したらよいかわからない」と言っていたある院生が帰り際には「どう書けばいいかわかった。早く帰って書きたい」と叫んでいたのがある。個々人が持ち帰った「おみやげ」は様々であったに違いないが、このワークショップの成果はこれだけでも十分あったと確信する。

第三の点については、詳細には書ききれない。ここでは、「はじめからパースペクティブを決めない」、「意識的に矛盾例を探す」、「Critical (厳しく吟味していくためのコンセプト) に分析していく」という妥協を知らない姿勢、マイクロに分析しつつマクロな視点を併せ持つというダイナミックさにはとにかく圧倒されたということを記しておくにとどめたい。

オープン・フォーラム

「東アジア文化圏の協働課題を探る」

講演者：永野慎一郎（大東文化大学）、三瀨正道（麗澤大学）、坪谷美欧子（横浜市立大学）

2005年10月22日(土)15:40～17:15

ジョリー幸子（愛知淑徳大学）

中国、韓国、日本という東アジアの中核を成す三つの国々はその物理的隣接性、或いは仏教、儒教といった宗教、道徳的規範の類似性を共有する反面、過去の歴史的な衝突や近年の海域領土に関する問題等で必ずしも三国が良好な協力体勢にあるとは言えない。これ等の共有する文化と相互の差異を明確にした上で、どのような協働を目指していくかというテーマで以下の三人のパネリストによる発言があった。

先ず大東文化大学の永野慎一郎教授は東アジア地域が世界人口（64億）の約3分の1に相当する20億人を擁していることをあげ、日、中、韓三国を中核とする北東アジア地域は(1)漢字文化(2)箸文化(3)儒教、仏教を共有していることを強調した。世界経済は今や三極構造化を辿っており、欧州連合(EU)、北米自由貿易地域(NAFTA)から米州自由貿易地域(FTAA)へ拡大、そして東アジア経済圏の抬頭について述べ、「東アジア経済共同体」の可能性を強く説き、未来志向の地域統合、多様性の共存について語った。

次に麗澤大学の三瀨(みつま)正道教授は「誤解の源—日中異文化の重要性」と題して日本のメディア報道等を通じて、現在の日本人の多くが中国人の行動や考え方について誤解しているようだと言及し、その例をいくつか挙げて説明した。5000年の歴史を誇る文明国中国には、そのような行動の背景には日本人には想像もつかない、それなりの理由が潜んでいる。反対に日本人やそのリーダーたちのとる行動についても中国人には納得できないことが沢山あると述べた。例えば中国人の意味する(過去の過ちへの)償いは具体的な行動で示して始めて謝ったことになり、口で謝罪すれば謝ったとみなす日本人とは根本的に異なるということである。どのようにすればこのような両国の文化の違いについて理解しよりよい関係を構築してゆけるのか、その考え方の基本、実践的行動等について熱く語った。

三番目のパネリストの横浜市立大学の坪谷美欧子教授が「国際移民システム」としての中国人の日本留学—日本社会と滞日中国人のアイデンティティ」と題して、20年前に中曽根首相の提案した「留学生10万人」計画以来、日本留学をしてきた中国人により日本の労働市場の人手不足に加速された「国際移民システム」が形成された。

滞日中国人の準拠集団との関わりと意識の五つのタイプは、①日本人との差異化、②転職において無意識に「日本人化」、③祖国の中国人友人とのプラス、マイナス方向の距離感、④「日本人でないこと」に相対的な不満感、⑤欧米の「能力主義」「平等主義」と比較して更なる

不満感が存在すること等を紹介した。そして、トランスナショナルな新中間層の日本への社会的統合について、移住者の多様なライフスタイルに適した、制度的保障や日本社会への受け入れ検討の必要性を説いて、締めくくった。

ラウンド・テーブル

「日本人の忘れ物—ゆるみ、きしみ、ゆがみ」

全体会議としてファシリテーターである岩男寿美子氏、久保田真弓氏、石井 敏氏、林 吉郎氏から問題提起がなされた後、4つの分科会に分かれて討議が行われた。

2005年10月23日(日)10:50~13:00

「ジェンダー」

岩男寿美子(武蔵工業大学)

参加者は7名、うち男性が1名とバランスを欠いた構成で、昨今のジェンダー・バッシングから結婚制度の崩壊まで多岐にわたる問題をとりあげたが、セクハラひとつとっても、問題点の認識が参加者によって大きく異なることが明らかになった。男女の関係性がかなり動いている時期にジェンダーを論じるには、世代を同時に取り上げる必要を痛感した。テーマを掘り下げることができなかった不手際をお詫びし、次回の改善につなげていただきたいと思います。

「マイノリティ」

久保田真弓(関西大学)

参加者が考える「マイノリティ」について、各人ポストイットに思いつくままに書き、それを項目ごとに模造紙に貼り検討した。例えば、「(権力)に抵抗しなければならない」、「言語的に不十分」「主流価値観を内化しつつ別に自らの価値観を持つ集団」などがあがり、さらにそれらを具体的に考え「学習スタイルの違い」「ゲッター化する」「ハンセン病、隔離されている」などと項目をつなげていった。時間不足だったが有意義だった。

「ジェネレーション」

石井 敏 (協大学大学)

「現代日本社会におけるジェネレーション間のゆるみ、きしみ、ゆがみ」の具体的な現象として、電車や教室の中で化粧に熱中する若い「化粧中毒女性」、公共の通路で円陣を組んで地べたに座り込む「ジベタリアン」等の「公的な場の私有化心理」問題が論じられ、続いて日々を無益に過ごす「ニート」と低年齢化する校内暴力・学級崩壊等の「バブル経済の後遺症」問題が討議された。実施可能な改善策としてボランティア活動を広く普及させることが提案されたが、重要な策はこれらの問題を改善するための社会支援システムの確立・充実である。そして最大の改善課題は、バブル経済がもたらした金銭・享楽至上主義の価値観による精神的荒廃問題に個人と社会がいかに関与すべきであるかであろう。 文責:海谷千波(独協大学大学院生)

「ビジネス・コミュニティ」

林 吉郎(青山学院大学名誉教授)

近年なぜ多くの日本企業が、ウソの道、無責任の道に走ったのかが問われ、その原因分析に議論が集中した。とくにモノ作りの名人だといわれた日本の製造業に何が起こったのかが問われ、それに関連して仕事とお金に対する心の変化、「人」中心の有機的組織から「仕事の効率」主導の機械論的組織への組織化原理のシフトが討議された。何か文化の深いところにひそむ潜在意識や価値観の大きな変化が、落とし穴として指摘され議論された。

多文化関係学会 2005 年度第 2 回理事会議事録(抄録)

日時: 2005年6月26日(日)午後1時～4時半

場所: 立教大学12号館2階B202号室(社会調査研究室)

参加者(敬称略): 青木久美子、伊藤明美、久米昭元、河野康成、小林登志生、小松照幸、西原鈴子、林吉郎、細川隆雄、松田陽子、杉本なおみ、杉本裕二、手塚千鶴子

審議事項

1. 各委員会委員の委嘱について

各委員会委員長より下記の方々を委嘱するとの報告があり了承された。(各委員会の最初の氏名が委員長)

事務局委員会: 青木久美子、小林登志生、古川雅子

財務委員会: 久米昭元、青木久美子

企画委員会: 小林登志生、クリス・オリバー、ミッシェル・モローネ、細川隆雄

組組織強化委員会: 抱井尚子、安西弥生、田崎勝也、原和也、田中悦子

ニュースレター委員会: ヒダシ・ユディット、徳井厚子、磯崎京子

学会誌委員会: 杉本なおみ、田崎勝也(副委員長)、石井敏、岡部朗一

広報委員会: 河野康成、久米昭元

石井ファンド運用委員会: 西原鈴子、久米昭元、河野康成

ウェブ管理委員会: 杉本裕二、青木久美子

北海道・東北地区委員会: 伊藤明美、飯田深雪、御手洗昭治、長谷川典子

関東地区委員会: 手塚千鶴子、抱井尚子、呉小莉、御堂岡潔、灘光洋子

中部地区: 岡部朗一、小松照幸

関西地区: 松田陽子、今井千景、中川慎二、

中国四国地区: 細川隆雄、大谷みどり

2005年度大会実行委員会: 小松照幸、青木久美子、伊藤明美、岡部朗一、抱井尚子、久米昭元、手塚千鶴子、林吉郎、松田陽子、御手洗昭治、ミッシェル・モローネ、ヒダシ・ユディット、細川隆雄

2. 第4回年次大会について

研究発表、基調講演、オープンフォーラム、ラウンドテーブルディスカッションを実施し、プレコンファランス・ワークショップを大会前日に実施することになった。

3. 年次予算案について

2005年度予算案が財務委員長より提案され、承認された。

4. 学会のウェブサイトについて

現在メディア教育開発センターのシステムを利用しているが、長期間継続できる見込みがなく、早急に独自のものを作る必要があるため、検討を重ねることになり、またホームページの改善に取りかかることになった。

5. 学会誌の投稿締め切り期限について

学会誌の投稿期限については大会終了後間もなくの締め切りよりも、もう少し幅をもたせ、査読者の時間的都合も考慮し、2006年度発行の学会誌第3号用より、原稿締め切りは毎年3月31日に変更することが提案され、承認された。

6. 他学会の共催によるワークショップについて

日本質的心理学会との共催で12月17日(土)に質的研究に関する講演およびシンポジウム(青山学院大学)で行われる案が承認された。(以上)

多文化関係学会 2005 年度第 3 回理事会議事録(抄録)

日時: 2005年10月21日(金)午後7時～9時

場所: 名古屋学院大学 第2研究棟 第2研究室

出席者(敬称略): 青木久美子、伊藤明美、石井米雄(顧問)、岡部朗一、抱井尚子、久米昭元、河野康成、小松照幸、小林登志生、手塚千鶴子、林吉郎、ヒダシ・ユディット、細川隆雄、松田陽子

[報告事項]

学会の新ホームページについて

10月20日より内容を刷新した新ホームページが開始された。これまでのホームページを開いた人は5秒すると自動的に新ホームページに繋がるようになっていることが報告された。当学会のホームページの新アドレスは下記の通りである。<http://www.js-mr.org/index.html>

[審議事項]

1. 石井ファンドの使い方について

西原理事提案によるファンドの運用方法について審議し、以下のようなことが合意された。石井ファンド(本学会顧問石井米雄氏から学会設立当初寄付された基金)は、今後、基金増額のための指定寄付の申し出がある場合には、それを受け入れ、同ファンド基金に繰り入れることとする。同ファンドは、本学会会員であって、大学研究機関等の専任の職をもたない「若手」研究者に対して、研究資金を助成することを目的に運用されるものとする。運用については、毎年、原則的に現有のファンド額の10分の1(約10万円)程度を使用することとする。運用は石井ファンド運用委員会が

提案し、理事会の承認を得て決定する。上記条件に該当する会員は本学会に対して研究助成(研究発表に伴う経費あるいは研究発表のための旅費)を学会事務局宛に申請する。なお、実施は2006年度からで運用のための細則については運用委員会で作成することになった。

2. 会員名簿の発行について

個人情報保護法案の成立によって、従来の会員名簿では若干の問題が生じる可能性があるため、今年度から新しく作成したホームページ上に、各学会員が開示してもよい項目のみを記載するようにし、名簿も会員のみが各自のパスワードを持ち、開けられるようにすることが合意された。今年度はそのような方式の会員名簿の作成に向かって努力することになった。

3. 新事務局の選出および業務引継について

現事務局は学会設立当時から業務を遂行しており、業務を遂行する個人に過重なしわ寄せが続いている。もともと2, 3年のローテーションで次に移転する予定だったにもかかわらず、現状のままでは犠牲者が出ることも予想されるため早急に新事務局へ移転することが大筋で合意された。

4. 第5回年次大会の開催場所と日程について

来年度は立教大学で2006年10月21日(土)、22日(日)に開催することが決定した。また、2007年度は関西地域で開催される見通しが示された。(以上)

多文化関係学会11月臨時理事会議事録(抄録)

日時:2005年11月27日(日)午後1時~5時半

場所:青山学院大学総研ビル7階第12会議室

出席者(敬称略):青木久美子、抱井尚子、久米昭元、小林登志生、小松照幸、林吉郎、松田陽子、ヒダシ・ユデイト、田崎勝也(学会誌編集副委員長)

審議事項1:杉本なおみ編集委員長辞任の承認について

理事会の協議の結果、杉本氏の学会理事および編集委員長の辞意を受理することが承認された。今回正式に杉本氏の理事辞任を受理するに際し、後任の編集委員長を早急に選任することが確認された。

審議事項2:問題再発防止策の検討について

今回の杉本なおみ氏の提議された問題を受けて、具体的な対策案について話し合われた。その結果、学会誌編集業務に留まらず、学会運営上発生するさまざまな問題に対して、適宜、臨時に会長直属の「特別調整委員会(Special Grievance Committee)」を発足させ、そこが問題の調停にあたるということで合意した。

審議事項3:学会誌編集委員長の後任の選出について

2006年2月末日まで田崎氏が編集委員長代行を務め、学会事務局移転を条件とした上で青木理

事が 2006 年 3 月 1 日以降編集委員長の任務を引き継ぐことが決定した。編集委員は、岡部朗一理事・石井敏理事に留任していただくことが確認された。

審議事項4:事務局移転の件について

青木理事の後任として、2006 年 3 月 1 日より小松理事が事務局長に就任し、事務局を名古屋学院大学に置くことが決定した。

審議事項5:事務局WEB個人情報管理およびディスカッションボードの導入について

事務局 WEB 個人情報管理およびディスカッションボードの設置に関する見積もりが承認され業者への発注が決定した。これに伴い、北陸先端科学技術大学博士課程後期在籍の八木龍平氏に WEB の管理を「ウェブ管理委員」として支援していただくことが決定した。

その他

- (1)「ホラロジー」の会(「ほらを吹く会:思いつきで夢を語る会」)を開催していく。(企画委員会、小林理事)
- (2)学会ホームページの英語版を立ち上げる。
- (3)任期途中の理事の変更は理事会に委任される。(この手続きについては、次回の総会で提案し、事後承諾を受けることとする。)現理事の抱井(1年間の在外研究)・杉本なおみ(辞任)・ヒダシ(帰国)の3名分の空席補充については次回理事会で決定する。(以上)

「私の提言」シリーズ 第2回

多文化関係学会ニュースレターでは今後の学会のあり方について、会員からの提言を紹介しています。今回は灘光洋子氏(成蹊大学)からの提言です。

灘光 洋子 (成蹊大学)

多文化関係学会について、いつも思うこと。それは、文化とコミュニケーションを大きなテーマに掲げる他学会と、どこが違うのかということである。むろん、成立後数年にしかならない本学会に道筋をつけていくのは、これからであり、その「未知数」な面が「可能性」として会員を惹き付けていることは間違いない。前号ニュースレターで、林会長は「学会はそこに入るとなんだか楽しく、気持ちが高まる時空間であってほしい」と述べておられる。アカデミズムの持つ一種の敷居の高さを取っ払い、オープンな語りの場にしたいとの意思を感じたのは、私一人ではあるまい。また、抱井会員は、多様な社会現象をミクロ的アプローチで研究し、問題解決となるような提言を発信していくことの重要性を指摘された。

それでは、楽しい時空間であると同時に、互いに切磋琢磨できる探求の場にするためには、どうすればいいのか。発信するに足るメッセージをどのような形で出していくのか。多文化関係学会には、多様な分野の研究者が集っている。研究者同士の視座の違いを超えて、新しい「何か」を作りたいとの志は感じられるものの、その多様さゆえに焦点が定まらない、具体的な「何か」に結実する前に日々の忙しさに流されてしまっているというのが、我々が直面している現状ではないだろうか。(これまで書いてきた事は、実はコミュニケーション学という分野が抱えてきた問題とも関連しているかもしれない。その学際的な性格故に多種多様なものを受け入れる懐の深さを擁しながら、「いったい、コアは何なの？」という反応を周囲から投げかけられてきたようにも思う。)

前述のお二人は、学会の理念的枠組みについて語られたが、ここでは具体的に何ができるかについて考えてみたい。即効性のある策など思いつかないが、学会として少しずつでもできることはあるのではないか。まず、大学院生を含む若手研究者にとって魅力的な場を提供すること。例えば、定期的な研究会などで自由闊達に意見交換のできる勉強の機会を持つ、若手対象に賞や研究補助金を設けることなども一案と思われる。各支部で、定期的な研究会を開催するようになってきているが、これはぜひとも継続して行っていただきたい。規模は小さくても、同じテーマに関心のある人たちが集まって、関連文献の輪読会をするのもよいだろう。ジャーナルへの投稿も、学会として一層奨励していく必要があるように思う。そのためには、会員への連絡をメールのみに頼らず、郵送による情報伝達や宣伝も考慮すべきではないだろうか。こうした活動の一つひとつを大切にしてくことで、ベテラン(?)も若手も共に学べる場になってゆけば、自ずと新しいアイデアやプロジェクトが生まれてくるような気がする。結局は、良い研究をし、その成果を世に問うていくことが、学会の存在意義を高め、社会的認知を得てゆくことに繋がるはずだから。

地区研究会報告

* 北海道・東北地区第2回研究会報告

2005年7月26日(火) 於:藤女子大学 地区研究会委員長:伊藤明美(藤女子大学)

(1)「中国における少数民族教育とエスニシティ」

話題提供者:李 明玉

御手洗昭治 (札幌大学)

李 先生は、これ迄自らが中国で行ってきたフィールド・ワークと文献資料に基づき、中華人民共和国の成立によって生まれた少数民族をめぐる政治的・社会的環境と問題点、加えて多文化教育と多民族教育と政策について、「民族平等理論」の視点から大変流暢な日本語で語られた。以下はその概要である。

研究発表では、まず、中国を多民族国家と捉え、中国における少数民族教育の理念や政策の展開について、「徳化主義」、「五族共和」の概念などの説明をされ、「三つの政策理念の相関構造」を実証的に検証し、次に教育によって異民族・異文化間の共存・共生をいかにすすめるかという命題について考察された。具体的には、中国における少数民族「平等理念」について概観し、国家理念のもとに行われている少数民族教育がエスニシティにどのようなメリットとデメリットをもたらしているかを語られ、最後に「民族平等構造」の理解に役立つ視座を力強く提唱された。

(2)「それでもすれ違いは起きる—文化の“線引き現象”について考える」

話題提供者：岡村輝人(北星学園大学)、久米昭元(立教大学)

文責：渡辺崇子

現代社会では、ITやマスメディアを通して世界の情報が入ってくるので、外国の人々との交流でも一見あまり問題が無いように見えるが、それでもすれ違いが次々に起こるという現実があり、そのような現象を理解するために「線引き」という概念を使うことが有効ではないかということ、岡村氏より空間の「線引き」について、久米氏より時間の「線引き」について豊富な視覚資料と事例を通して話を伺うことができた。

両氏の提案する「線引き」の概念には、自分たちの文化の中の線引きについては慣れているが、そうでない人たちの所ではどう線を引くのか分からないというところから色々な問題が起きやすいという考え方が含まれている。

岡村氏は、まず、基本的「線引き」の考え方として、都市、国家、世界、それぞれの「線引き」現象について述べた。国家レベルでは、北方領土、竹島、尖閣諸島の問題を取り上げたことが印象的であった。また、世界地図は自民族中心主義がよく表されるものであることを他国に見られる世界地図の例を挙げて述べた。氏は事例研究として道路、運転慣行、土地、家屋、住居内の「線引き」にも触れ、地域や、文化の違いによって異なることを改めて認識させられた。

久米氏は、伝統的に自然を中心とした農業社会であった日本が「時間」の観念において欧米化されたことによるきしみを指摘した。最近のJR宝塚線脱線事故の「90秒遅れ」の問題はそれが顕著に表われた例である。また、氏は文化を超えた時に感ずる時間認識の違い、日常生活における時間感覚、日本独自の時間感覚、さらには事例研究として意思決定と時間感覚を取り上げた。個人的には、今まで漠然として捉えていた“時間”という概念を整理することができた。

最後に、この「線引き」のフレームワークを用いた将来的な研究の可能性が示唆され、比較文化研究、異文化コミュニケーション研究をする者は大きなチャレンジを受けたと思う。

* 関東地区研究会報告

2005年7月23日(土) 於:青山大学 地区研究会委員長:手塚千鶴子(慶応義塾大学)

(1)「文化的アイデンティティにおける文脈と主体性の相互作用

—「外国語指導助手」の日本の教育実践への対処の事例から—

話題提供者:浅井亜紀子(カリタス女子大学専任講師)

(2)「異文化接触研究での関係論的アプローチの必要性

—留学生の文化規範理解についての分析—

話題提供者:小柳志津

手塚千鶴子(慶応義塾大学)

2005年度第一回関東地区研究会は、カリタス女子大学専任講師の浅井亜紀子氏とお茶ノ水女子大学フェローの小柳志津氏の若手研究者御二人にご研究を紹介して頂き、その前に現在文化をめぐる研究において議論のつきない、文化差などという実体的に捉えられる文化の特徴があるのか、特に比較文化的研究ではなく異文化接触研究において、どう文化を捉えるべきかという問題提起がなされた。小柳氏は、関係論的アプローチを提唱し、具体的な相互作用場面でその文脈に応じた文化規範の解釈がなされ理解されていくプロセスを日本の留学生について考察し、また境界意識がどうこのような文化規範理解に及ぼした影響を在日留学生と在豪日本人留学生についてのご研究を論じた。浅井氏は従来研究の少なかった外国語指導助手の外国人を対象に、日本での異文化接触体験において、本国でと異なる教育実践や表象に遭遇したとき、どうその文脈や状況に応じ、主体性を持ってそれらに対応し、自文化、異文化をとらえ文化的アイデンティティをもつかを考察された。

お2人の研究では、質的方法論が中心であったが、量的なものとの併用もみられ、こうした方法論をめぐる議論も、お2人の研究内容自体についてと同様、ご発表後の質疑応答のなかで灘光学会員司会のもとフロアと活発に繰り広げられた。

ここでの興奮はそのままに、懇親会へともちこされる勢いで、大変知的刺激に満ちた研究会であったといえよう。

* 関西地区第3回研究会報告

2005年7月22日(金) 於:神戸大学 地区研究会委員長:松田陽子(神戸商科大学)

(1)「ニューカマーの就学・不就学に関する一考察—西日本・在日ラオス定住者の実態調査より—

話題提供者:乾 美紀(大阪大学人間科学研究科助手)

落合知子(神戸大学大学院国際協力研究課博士課程)

乾氏は、西日本に居住する在日ラオス系定住者の就学・不就学の実態を明らかにし、その就学・不就学をもたらす要因の分析を発表した。特筆すべきは、1997年よりボランティア相談員として在日ラオス系定住者家庭と接し、2004年よりインテンシブな調査を行い西日本に居住するラオス系定住者のほぼすべての家庭を網羅したという調査の緻密さである。

そうしたこまやかなインタビューと参与観察の結果、高校終了年齢以上の子ども41人を持つ20世帯に焦点をあて、教育状況とその結果を生んだ要因が分析された。子どもが高校以上の教育に就学している家庭ほど、ラオス系定住者の集住地域から離れて居住しており、親子関係が安定し、親の学歴も高く、学校からのサポートに満足している傾向が見られた。反対に不就学家庭ほど集住地に居住し、親子関係が希薄で、親の学歴が低く、学校サポートに不満を持つ傾向が認められた。

こうした傾向から不就学の要因として同世代のラオス系の若者との過剰な交流、親や学校との関係の希薄さなど、地域・家庭・学校とのアンバランスな関係が挙げられた。

発表後のディスカッションでは「ラオスの教育状況はどうなっているのか」や「在日ラオス系定住者が子どもの教育の比較対象と設定しているのはラオスの教育事情か日本人家庭の教育事情か在日ラオス人の教育事情か」「どんな教育レベルの親も低所得層の職業についているなど日本の階層と学歴の関係と逆転現象を起こしている」「日本社会で学歴をえればラオスの若者は相応の仕事を獲得しているのか？」等の質問コメントが出され、活発に意見がかわされた。

(2) 「幕末期、日本人の西洋文化受容について—長崎における新教宣教師、フルベッキを中心として」

話題提供者:村瀬 寿代 (桃山学院大学兼任講師)

柳本麻美(桃山学院大学 兼任講師)

1859年の来日以来、多くの人材を育て、外交、政策、翻訳、留学生派遣、お雇い外国人招聘など、明治政府とも深く関わった新教宣教師フルベッキについての解釈が発表された。歴史研究から異文化交流に視点を移し、独自の調査史料に基づく「西欧的価値観を無理に日本に移植しようとしなかった」「必要な知識と学識を与えてくれる理想の教師であった」というフルベッキ像が検証された。発表後には、「日本人の西洋文化受容」の観点からのさらなる考察が望まれるとの意見が出された。今回の発表で印象的であったのは、フルベッキへの個人的アプローチである。歴史を文化、コミュニケーションから読み解くという異文化交流史的考察

の試みは新鮮であった。全般として、新たな研究方法への可能性が感じられる大変興味深い発表であった。

Call for Papers

第 3 号になります我が学会の学会誌『多文化関係学』ですが、投稿の締め切りは **2006 年 3 月 31 日**に変更されましたので、ここにご案内申し上げます。

投稿先: e-mail: jmrsbm@js-mr.org

〒261-0014 千葉市美浜区若葉 2-12

独立行政法人メディア教育開発センター内

多文化関係学会 学会誌編集係

詳しい投稿規程・執筆要綱は <http://www.js-mr.org/magazine/index.html> をご参照ください。

奮ってのご投稿をお待ち申し上げます。

多文化関係学会学会誌編集委員長

地区研究会のお知らせ

* 関東地区研究会案内

「多文化関係学会関東地区ワークショップ」

日時: 2006 年 3 月 9 日 (木)、10 日 (金) 9:00~17:00

場所: 立教大学 8 号館 PC ルーム (東京都豊島区西池袋 3-34-1)

参加費 (資料代含む): 会員 2000 円、非会員 4000 円

対象：Excel 初心者

定員：50 名

講師：河野康成(立教大学) 青木久美子 (メディア教育開発センター)

申し込み・問い合わせ：手塚千鶴子 ctezuka@ic.keio.ac.jp

内容紹介：

Excel は、表計算ソフトで、表やグラフの作成や統計分析をすることが可能なソフトウェアです。また、SPSS は、Excel よりも複雑で高度な統計処理が可能なソフトウェアです。このワークショップでは、質的研究をしている方や量的研究を始めようとしている方を対象としています。2 日間で、大まかな Excel の使い方と SPSS での簡単な統計分析ができるようになることを目標としています。

***中部地区第 1 回研究会案内**

日時： 2006 年 3 月 18 日 (土) 午後 3 時から 5 時まで

場所： 南山大学 L 棟 9 階 910 号会議室

(名古屋市昭和区山里町 18 Tel. 052-832-3111)

話題提供者： 小松照幸氏 (名古屋学院大学)

トピック： 多文化関係学へのアプローチ---その領域と研究方法をめぐって
終了後、午後 5 時 30 分より、話題提供者を囲んで近くのレストランで懇親会 (会費約 3,000 円) を開きますので、ご参加ください。

研究会と懇親会へご出席される方は、2006 年 2 月 25 日までに研究会担当の岡部朗一 (南山大学) 宛、メール(okabe@nanzan-u.ac.jp)でお知らせください。

***中四国地区研究会案内**

日時： 2006 年 2 月 18 日 (土曜日)

場所： 愛媛大学農学部

話題提供者：

- (1) 武智盛浄 (伊予岡八幡神社) ロシアと愛媛との国際交流
- (2) 大谷みどり (島根県立大学) 外国人指導助手 (ALT) と地域との交流

研究会担当： 細川隆雄 大谷みどり

連絡先： FAX : 089-946-9839、 TEL : 089-946-9839

Email： hosokawa@agr.ehime-u.ac.jp

関連学会情報

* 第 21 回異文化コミュニケーション学会(SIETAR)年次大会

2006 年 7 月 1 日(土)、2 日(日) 於：麗澤大学

conference@sietar-japan.org

* 第 36 回日本コミュニケーション学会年次大会

2006 年 6 月 17 日(土)、18 日(日) 於：桜美林大学(東京都町田市)

大会テーマ「文学とコミュニケーション-文化を読む-」

cajoffice@caj1971.com

申込・問い合わせ：〒464-8601 名古屋市千種区不老町

名古屋大学大学院教育発達科学研究科 高井次郎

Tel. & Fax 052-789-2653 E-mail jtakai@nucc.cc.nagoya-u.ac.jp

多文化関係学会第5回年次大会のお知らせ

日にち:2006 年 10 月 21 日(土)、22 日(日)

場所:立教大学(東京都豊島区西池袋3-34-1)

詳しくは、次回ニュースレター及び多文化関係学会ホームページにてお知らせいたします。皆様の奮ってのご参加をお待ちしています。<http://www.js-mr.org/index.html>

編集後記

今回、この 2006 年多文化関係学会ニュースレター第 8 号に記事をお寄せくださった会員の皆様、ありがとうございました。この次、第 9 号ニュースレターは 2006 年 6 月の予定です。ニュースレター委員会はこれからも読者の皆様のご要望に応えるべく努力していく所です。

(NL 委員会: J. ヒダシ、徳井厚子、磯崎京子)

多文化関係学会事務局

〒261-0041 千葉市美浜区若葉 2-12 メディア教育開発センター内

Tel: 042-298-3422 e-mail: jsmr@nime.ac.jp

多文化関係学会ホームページ: <http://www.js-mr.org/index.html>